
とある科学の氷結使い（フリーズバンド）

ジュンボ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある科学の氷結使い（フリーズバンド）

【Nコード】

N8687Z

【作者名】

ジュンボ

【あらすじ】

人口230万人の学園都市に住むとある少年の成長の物語です。

今回初めて小説を書きますので非常に読みづらいです。
ですが一生懸命書きますのでよろしくお願いします。

第1章（前書き）

第1話

第1章

（人は、結局独りなんだ。どんなに友情や絆なんて表現があっても
ささいな誤解から人は裏切り、裏切られる。それが世間であつ
ても同じことだ。 だから俺は……………）

）
♪

目覚ましのアラームがワンルームの部屋に鳴り響く。

「……………つくそ！」

目覚まし時計を止める。月曜日の7時だった カーテンから差し
込む光が部屋の一部を明るく照らす。

「学校か、正直面倒だな。」

ここは、人口230万人の学園都市。そのほとんどは学生を占めている。そしてこの町は超能力の開発が行われている。学生のほとんどは超能力を使うことができる。そしてこの男、宮離 春樹（みやり はるき）もまた超能力を開発されている。

「それにしてもいつになったら夏休みなるんだよ！」

寮を出て、少し曲がりコンクリートの非常階段をゆっくり降りながら駐輪場へと向かう。

駐輪場に止まっているのは自転車ではなく原付バイクである。この学園都市に住んでいるだいたいの学生は寮に住んでいる。年齢や校則に問題がない場合、免許をとっても問題がない。

朝の通学はバスや電車などを利用する学生が多い、しかしバイクの方が時間を気にしなくていいと言う長所がある。
宮離はバイクに乗り込み、学校へと向かう。

—学校—

「おはよー」

「今日システムスキャンうちの学校だよー」

「この前よりレベル上がってるかな」

朝の教室はある話で盛り上っていた。

システムスキャン 能力の定期的な測定である。測定の評価はレベル0～5までの6段階評価される。

ガラリとドアを開けると宮離は教室に入る。しかし、クラスからの反応は冷たい。それは単にいじられているからではなく、宮離が入学してから一学期の終わりが近いこの日までクラスに積極的に関わっていないからである。

成績もどちらかと言うと、いや、どちらかと考えるまでもなく下の方で追試も確定的である。本人もそれはよく解っている。だがクラスメイトはそんな彼をきにかけない。よく解っている。

しかし今日はなぜか、本人にも解らない事が起きたのだ。クラスの輪の中から一人が宮離の席に向かって来る。

「よう、宮離！今日はシステムスキャンだなお前の能力ってなんなの？レベルは？便利なやつか？珍しいのか？楽しいのか？」

いきなり質問され、ずいぶん内容が多くて返答に戸惑いつつ

「便利かどうかは知らないが珍しくて楽しいのはお前だ。」

宮離は質問に答えつつ、冷たい態度をとる。

「いやいやそんなユーモアな回答を求めているわけじゃないんだ」

ユーモアに聞こえたようだ。

「ただお前の能力について少し気になってさ、それで聞いてみた

「んだ、でどんな能力なんだ？」

再び質問する。

それと同時にホームルームのチャイムがなる。黒板には、あらかじめ決められている測定場に行くように指示されていた。先生は測定の準備で忙しいようだ。

「何でもいいだろ！」

ガラツと椅子から勢いよく立ち上がる宮離。

「待ってくれ宮離！」

「……なんだよ。」

「オレ、不知火！ 不知火 暁（しらぬい あきら）」

「だからなんだよ……」

「オレ今日、校庭で測定があるんだ！ 面白くないかもしれないけど良かったら見に来てくれ」

「………文化祭の出し物か！」

「ナイスツツコミ！」

ぐつと右手の拳を縦に向け親指を立てる不知火。それに対して測定場所へ向かう宮離。しかし、宮離はあらかじめプリントを見直す。あらかじめプリントで決められている宮離の測定場所は………校庭。

「…………ツ」

舌打ちした宮離は眉間のシワを波のようによせていた。

発火能力（パイロキネシス）（前書き）

― 第2話 ―

発火能力（パイロキネシス）

校庭ではすでに別のクラスが能力測定を行っている。学園都市の超能力はあまりにも種類やレベルが多い。そのため、測定方法も多い宮離は体操服に着替えて校庭と校舎の通り道にある階段に独り座っていた。すると、校庭から巨大な火の玉が出現した。あらかじめ校庭の200Mトラックの外側には消火ロボットと他の生徒が口を開けながら見ていた。

内側には生徒が一人立っていた。

不知火である。

『測定終了。不知火暁レベル4』

アナウンスが校庭に流れると外側にいた消火ロボットが内側に入り炎を消していく。あとに残った黒煙が、熱を放ちながら校舎に向かう。しかし他の生徒は全く気にしていない、それどころか内側にいる不知火のところへ走っていた。宮離だけは座っていた。特に行く理由がないのだ。むしろ、見たくもなかったのだ。

「スゲー不知火。」

「さすがうちの学校のエース♪」

不知火の周りは不知火を賞賛する声で賑わっていた。

「ありがと。」

それに答える不知火。

これが不知火暁と言う人間なのだ。能力が高く、みんなから慕われ、

明るく、容姿も悪くない、誰しも一度は夢みる人格だろう。
才能、人気、容姿、すべてを備える不知火は、まさに少年漫画の主
人公のようだった。

「おい、宮離〜！」

そんな不知火とはほとんど別世界の住人、宮離は近づいて来る不知
火を警戒した。

「どうだった？」

「典型的な発火能力者だな」
バイロキネシスト

不知火の質問に対して宮離は冷静に答える。

「いや、宮離の能力測定の事だよ」

「まだこれからだ。」

「何の能力だ？」

「そのうち解るだろ。」

「ここで測定つてことは、精神系じゃあないよな」

「まあな」

「よっしゃ〜！」

不知火が大きな声で叫ぶ。

「……なんだよ」

「今、宮離と初めて会話が成立した〜！」

「……だからなんだよ。」

宮離は鬱陶しそうに不知火を見る。

「いや、素直に嬉しくて！。それに、一度でいいから宮離と話してみたかったんだよ。もうすぐ夏休みじゃん、だから少しでも宮離をクラスに溶け込めるようにしようと思ってさ。ほら2学期からは大覇星祭とか学校対抗の行事があるだろ。少しでもみんなの能力を活かそうってクラス委員長の宝条さんと昨日話してさ俺たちの能力でババーンと」
「一つ言っておくぞ。」

不知火の話を裂くように宮離は言葉を出す。更に宮離は鋭い目付きで不知火を見る。

「な、なんだよ。」

「……俺たちみたいな他人と比べてレベルの高い能力をもつやつは、それをコントロールする必要があることを、常に意識しなくてはならないんだ。でないと、周囲の人間を傷つける結果を招く。それだけは覚えておけ！」

不知火はきよんとする。

「それは、そうだな。うん覚えておくよ。宮離の言うとおりだ。」

不知火は宮離の忠告に対して曖昧に答える。

『次、宮離！ 測定位置に付け。』

アナウンスが校庭に流れると、宮離は座っていた階段からスッと立ち上がり200Mトラックの内側に立つ。不知火は宮離の言った言

葉を、もう一度よく思い出す。

「……高い能力。……俺たちみたいなの？」

不知火がそんなことを考えるとトラックの内側で、宮離は地面に手をつける。次の瞬間、校庭はスケート場のように均等に氷が張られていく。

『測定終了！ 宮離春樹レベル4！』

不知火は先生のいる白いやねのテントに走り込んだ。

「坂月先生！」

「なんだ、不知火。」

「い、今！ 宮離の名前が、それにレベル4って」

「ああ、宮離は学園都市でも珍しい原子発生型で名前は……」

坂月先生はプリントをめくり、能力名を確認する。

「そうそう氷結使い。（フリーズハンド）」

氷結使い（フリーズハンド）（前書き）

— 第3話 —

氷結使い（フリーズハンド）

「…………ふう」

宮離は少しため息を吐くと校庭と校舎の間にある階段に座っていた。7月の初めではあるが、日差しが強く気温も高い、しかも午前中はシステムスキャンで、例え測定が終わっている生徒であっても、校庭に残らなければならない。

宮離は面倒くさそうに階段の端のわずかな木陰で独り休んでいた。そこへ一人の生徒が走って近づいてきた。

不知火である。

「宮離、宮離、宮離、ミ、ヤ、リッ、見たぞ、聞いたぞ宮離の能力。凄かったって言うかレベル4って言うか感動した。」

本日の日差しよりも暑苦しい不知火が宮離の隣に強引に座り込む。

宮離は、不知火を無視してスポーツドリンクを手に取った。

「くれるのか？」

「んなわけないだろ！」

宮離は即答する。

不知火はスポーツドリンクを手に出し、それを宮離に差し出すように渡す。不知火はそのあと宮離にお願いする。

「お願い、冷やして。」

「…………チツ」

宮離は舌打ちすると不知火のスポーツドリンクを手に取りそれを不知火に返した。

「凄い！ キンキンに冷えてるじゃん！」

不知火は奇跡でも目の当たりにしたかのようにスポーツドリンクを強く握る。
そして

「宮離がオレの願いを聞いてくれた〜！」

絶叫する不知火。

「この感動を誰かに伝えたい〜」

「勝手に伝えてろ。」

「おい、みんな。宮離がドリンク冷やしてくれるぞ〜」

「……ッ」

宮離はその後、スポーツドリンクを握りまくったことは言うまでもない。

「今日はシステムスキャンお疲れさん。みんな良かったと思う、特に不知火はわが校で一番の成績だ。これなら学園都市の『8人目のレベル5』になったっておかしくはない！今日の授業は午前中のシ

STEMスキャンだけだ。みんなよく休むといい。」

教室中からの歓声に不知火はてれ顔になる。宮離は教室の机に座ったままだった

「宮離く遊ぼうぜ」

本日のヒーロー不知火が宮離に言う。

「帰る」

「そう言うなよ」今日の冷蔵庫「宝条さんも来るからさ」
「宝条さん？」

宮離は、聞きなれない名前を聞いて少し疑問が浮かんた。その答えを不知火が答える。

「いや宝条さんだよクラス委員長の！」
「へー」

次の瞬間、宮離はとんでもないことを言う。

「クラス委員長って宝条さんって言うのか。」
「ひ、ひどいよ宮離くん」

宮離の爆弾発言に不知火の後ろから来た宝条 有華（ほうじょう ゆか）が少し悲しそうに不知火の背中に隠れる。

宮離はクラスメイトの名前を全く覚えていないのだ。

「あーよく遅刻する時に朝のプリント渡してくるやつか。」

「クラス委員長をプリント宅配員扱いか、さすがうちの学校の裏工
ースだ。」

「もっつ、不知火くん。納得してどうするの！」

宝条が両手をぎゅっとにぎり胸の前に出して答える。しばらくしてなぜここにいるのか思い出す。

「あつ、あのね宮離くん。もし今日予定がなかったらみんなで遊ばない？」

「断る。」

「うう……………」

宝条は撃墜された。

「少し歩くだけでもいいだろう」

「……………少しだけだぞ。」

不知火はなんとか宮離をとめた。

気がつくと夕方になっていた宮離は朝乗ってきた原付バイクをゲームセンターの駐車場におき、遊んでいたが、今は喫茶店にいる。

「いやあー今日は楽しかったーまさか宮離が運動神経バツグンとは思わなかったよ。」

不知火がオレンジジュースを飲みながら座っている。

「まあな」

宮離が答える

「宮離くんはどうしてあんなに強いのか？部活とかやってたの？」

宝条はミルクティーを飲みながら続けて聞いてくる。

「部活はやってなかった。中学の時まで風紀委員^{ジャッジメント}だったんだ。」
「風紀委員！？」

不知火と宝条の二人は驚いた。

「今日は楽しかったよ。じゃあ」

宮離はエスプレッソを飲み干し喫茶店を後にした。

火炎放射（ファイヤフロス）（前書き）

— 第4話 —

火炎放射（ファイヤフロス）

【ドンドン】

ドアを勢いよく叩く音がワンルームの寮に響く。

時刻は7時半。テレビをつければ朝のニュースか天気予報、占いコーナーなど朝の定番の番組がやっている。

「……なんだよこんな時間に。」

宮離はテーブルに置いてある写真立てを見つめた。

写真に移っていたのは数人の学生がおそろいの腕章を見せている姿、端には『結成記念』と油性マジックで書かれていた。

宮離は写真立てを手に取る

「何で昨日、あんなこと言っただろう。」

「何の写真だ宮離。」

うわあと言う声が部屋中に響き宮離は自分の隣にいつの間にかいる不知火を見て驚く。

「何でお前がここにいるんだ！」

「ドア叩いたら空いちやって、そしたら宮離が写真を見ながら切ない目をしていたからさ。気になって勝手に入った。」

「……………そうか。」

宮離は簡単に答え写真をしまう。

「ん？怒らないのか。」

不知火は宮離に聞く。

「いや、気づかない俺も悪い。」

「……………あのさ宮離。」

「なんだ。」

「さっきの写真……………」

（気づいたか…）

宮離は心の中で思った。

不知火は、きつと写真に映っている時に何かあつて宮離の性格がこんなふうになったのだろうと気づいた。そして不知火は宮離に言った。

「すっげー巨乳の女子映ってなかった？」

「……………。」

宮離は無言で部屋を出た。

「待ってよ」

不知火が全力で走りコンクリートの階段を降りる宮離に追い付く。

「宮離違うんだって!-!」

「何がだよ。」

「おれは巨乳フェチじゃない。」

「知ってる。」

「あと巨乳のことで今日は来たんじゃない。」

「ん!、そういえば、何しに来たんだ。」

「今日は一緒に学校行こうと思ってさ」

宮離は階段を降り駐輪場に停めてある原付バイクにのる。

「えー今日もバイク乗るのかよ」

「当たり前だ！歩いてたら遅刻するだろ。」

宮離はヘルメットを被り予備のヘルメットを不知火に軽く投げる。
不知火はそれを見事にとる。

「…ナニコレ」

「ヘルメットだ。とにかく被れ！時間もないし後ろに乗れよ不知火。」

「み、宮離…この感動を」「早く乗れ！」

二人は原付バイクに乗りいつものを走り抜ける。歩道を歩く学生は羨ましそうに二人を見る。

「なあ宮離！」

すっかりご機嫌な不知火は右手をバイク後ろに伸ばす。それを見て宮離は不思議に思う。次の瞬間、不知火の右手から炎がでた。それに押されるようにバイクの速度が上がっていく。

「おいおい！」

宮離はバイクのバランスを取る。

「はっはゝ驚いたか。火炎放射ファイヤフロスの応用番さ」

「火炎放射？」

「あるちびっこ先生が発表した論文から演算したスキルだよ。」

原付バイクは辛い坂をなんともなく越えていく。

「そういえばどこまでいつてるんだ。」

「何が？」

宮離は後ろに乗る不知火に聞く。

「その…クラス委員長と」

「ん？ドコト？」

「付き合ってるんだろ、お前と委員長。」

「いやいや付き合っていないよ何言ってるんだ。宝条さんとオレは別に仲良くしてるだけでそんな関係じゃないぞ！」

とつさに焦りだす不知火を見て宮離は

「でも、お似合いだろ学校一番の能力者とクラスで一番人気の委員長。二人が付き合えばそれこそ面白いと思うぞ、クラスの受けも良いしな。」

「宮離……お前だって能力は上じゃないか。それに元風紀委員でバイクの免許もある。」

それなのに何でクラスに積極的に関わらないんだ？……………あの写真、何か関係あるのか？」

「あの写真は……………」

宮離はしばらく黙り込む。そのまま無言の二人は学校えたり着く。

「あれ宮離くんと不知火くんだ。」

「宝条さんに教えようか。」

「委員長く彼氏来たよく」

「かかか彼氏じゃないよく」

宝条は顔を真っ赤にしながら否定する。そんな姿にクラスメイトはしばらく笑う。

そんな宝条は宮離と不知火が来たときもたじろじていてろくに話せないでいた。

「朝のホームルームを始める前にみんなに大事な話がある。」

いつもと違う朝のホームルームが始まった。どうやら最近、『能力が上がるよ』と言うキャッチフレーズで学園都市にドラッグが配られているらしい。

「今回のドラッグは能力の異常な上昇、人格の崩壊、第2の人格の出現などが報告されている。みんな知らない人に声を掛けられたらすぐに逃げることで上だ。」

上昇薬物（スキルジャンプ）（前書き）

— 第5話 —

上昇薬物（スキルジャンプ）

周りの空気が思い。

不知火はそう思った。教室の黒板には、『緊急会議のため自習』と書いてあった。

理由は朝のホームルームで言っていた。『能力が上がる麻薬。』本当にそんなものがあるのか？信じがたい事実ではあるが、能力次第で進学まで決まるこの町では、販売されてもおかしくなかった。

しかも人格が変わり凶暴化する効果まであり、今まで使用者の手によって学生はもちろん警備員や風紀委員にまで被害が及んでいる。

アンチスキル
ジャックシメント

自習は二時間目まで続いた。

不知火はシャーペンをくるくる回しながらもう片方の手で下敷きを崩いでいた。その表情はどこか眠そうだった、そんな中で教室の隅では、宮離が少し周りのクラスメイトと話をしていた。

つい先日まで誰とも関わらない宮離は、少しずつクラスに溶け込んでいく。

不知火はそんな宮離を見て思うことがある。そうそれは宮離の過去だ。

（今朝宮離の部屋にあった写真……多分、風紀委員の腕章だったような気がするんだけど……なんか違う気がする。）

不知火は例の薬物も気になっていたが写真の腕章が気になっている

のだ。

「どうしたの不知火くん元氣ないよ。」

クラス委員長の宝条はそんな不知火を気にする。

「いや、大丈夫だよ。それより宮離のことだけど。」

「宮離くんどうかしたの？」

「宮離、元風紀委員って言ってたよな。」

「うん、でも風紀委員ってそんなに簡単に辞めれないって聞いたことあるよ。」

宝条はそんな疑問を不知火に伝える。

実は、不知火もそこが気になっていた。

そう簡単に辞めれない風紀委員の制度と腕章の微妙な違い。宮離には過去に何かしらの事件があったはずだ。しかし何があったのか、本人にしか解らないのか、ならば調べるしかない。不知火はそう考えた。

「宝条さん。」

「何、不知火くん」

「宮離の過去を調べてほしい。確か一年前くらいを。」

「せ、先生に聞いたりしてみよ。」

自信なくそう答える。

ならばと不知火は宮離の席へ行く。

「宮離！、調べてほしいことがある。」

「例の薬物のことか？」

宮離は不知火の知りたがっている内容を答えた。

「正解」

「……無理だ。」

「なんでだよ宮離、この町から薬物を追い出そうぜ！」

「それは出来ない。いいか不知火、薬物を乱用する人間はまず薬物に近づき、そこから乱用していくんだ。それに俺たちが何もしなくても風紀委員や警備員が何とかするさ。」

宮離は不知火の危険な行動にくぎを打つように警告する。

「大丈夫だって。ここにはレベル4が二人もいるんだし、俺たちの能力でババーンと」

「不知火、システムスキャンの時にも言ったが、俺たちみたいな人間は能力を制御しないと危険なんだ。」

「じゃあ宮離はこのまま放っておくのかよ！」

「やめてよ不知火くん！」

宝条はここぞとばかりに叫ぶ。

「宮離くんの言うとおりだよ。私たちで何とかなる問題じゃないよ。」

涙目になりながら宝条は不知火を説得する。

「……そうだな、確かにスキルジャンプ上昇薬物に手を出すのは危険だな。」

不知火は宝条に謝った。

しかしその時、宮離は眉をひそめた。
変だ。

「不知火、お前」

まさにその時

「大変だ〜」

隣の教室から何か叫び声がする。そのため宮離の言葉が遮られた。

「隣の教室のやつがいきなり暴れだしたんだ！」

その言葉を言うが早い、宮離は我先にと教室を出ていく。その姿を見た宝条は思った、これが宮離春樹なのかなと

常に危険を察知し、風紀委員で無くとも誰かを助けようとする。でもそれは他の人からは非常に見にくい。

でもなぜそんな人が風紀委員を辞めたのか、もしかして

「辞めさせられた…」

宝条の小さな声が教室に漏れる。

隣の教室は黒い粉が舞っていた。まるで戦争映画などで爆撃されたようだった。そんな教室の真ん中に、誰かがたっていた。彼は右手を振りかざすとそれまで教室の壁や床に散らばっていた黒い粉が集

まってくる。

「おい！何してる。」

宮離は右手を使っている少年に声をかける。たが聞く耳を持っていないようだ。彼が右手を降り下ろすと、黒い粉が宮離やその他の生徒に襲いかかる。それはまるで黒いムチのようだ。

宮離は急いで氷で出来た壁を作りムチのような黒い粉ごと凍らせる。やがて氷は黒い粉を包みながら犯人に近づき右手を掴んだ。

「あああああ い ああ ああ ああ ああ
い い い い」

犯人は絶叫し倒れた。

「ス、スゲー」

「見たか今の！！」

「あれがレベル4の実力」「レベル1のあいとはえらい差だ！」

クラスメイトたちが宮離の能力に驚く。

しばらくして救急車と警備員が到着する。犯人はすぐに救急車に乗せられる。その瞬間、犯人は何かを口に出した。

「ははあ……はあ……なんだ、お前ら……ジャンプ出来ないのかあ……」

救急車のドアが閉まり学校の校門から出ていく。

今日はその後の授業は休みになり、集団下校となった。

宮離は不知火にあることを言いそびれてしまった……

その内容は、

「……………スキルジャンプ上昇薬物の名を何処で聞いたんだ。あれは、使用者か販売者にしか解らない言葉だ。」

なぜこんな情報を宮離が知っているのか、それはスキルジャンプ事態が一年前、宮離の追っていた事件だったからだ。
過去に宮離が追っていた事件が薬と共に現代によりみができる。

推理開始（クエスチョン）（前書き）

— 第6話 —

推理開始（クエスチョン）

それから2日たった。

不知火と宮離はそれぞれの謎を追いかけていた。

まず、不知火は宝条と一緒に宮離が風紀委員だったころの経歴について調べていた。そのためにまず二人は、生徒の個人情報をしりつつ、その上それを誰も怪しまない人物に聞いた。そう、宮離たちの担任である。

宝条有華は不安な足取りで職員室へ向かった。

「坂月先生！」

「おお！宝条じゃないか。どうしたんだ？」

「先生に聞きたいことがあります。」

「不知火の口説き方かあゝ」

はうゝと言いながら宝条は顔を下に向ける。みるみるうちに赤くなる耳たぶを見て先生は『冗談だよ』と笑いながら謝る。

「宝条、お前は可愛いなあ。」

「そんなことは今はいんです。」

宝条は本題に戻そうとする。

「あの、ジャッジメント風紀委員だったころの宮離くんの過去について教えて下さい。」

「本人に聞けばいいじゃないか？それか、君の能力で観るとか。」

確かにそうだがあの宮離がそれを拒んでいた。

それなのに第三者から聞こうと考える宝条。

彼女自信こんな調べ方は間違っていると思っていた。しかし、それでも知りたいのだ宮離がどうしてもあんな性格になったかを。やがて先生は机から黒いファイルを取り出し口を開く。

「……………宮離春樹、中学時代に風紀委員として第一線で活躍。能力者の確保術、現場の捜査、交通安全ポスターの作成に優れていた。」
確かに、それは先日隣の教室での事件などでよく解る。

「だが一年前、麻薬事件の捜査中、いろいろあつて辞めさせられた……」

先生はそこまで言つて『ここから先は言えない』と言つた。

宝条は軽く頭を下げ職員室を出る。そのとき先生は『宮離を助けてやってくれ』と言つた。

確実なのは二つ、一年前に宮離が追っていた事件がまた起きていること、そしてやはり“辞めた”のではなく“辞めさせられた”こと。

不知火暁は夕方の街中で携帯電話を片手に知り合いの風紀委員に聞き込みを開始した。

腕章の謎を探す不知火の姿はまるで誰かに操られているようだった。

『宮離春樹？知らないなあ。』

『風紀委員辞めさせられたやつなんてまともじゃないぜ。』

なかなか宮離を知っている人にたどり着けない。
しかし、それでも知りたかった。宮離はどうしてあんな性格になっ
たかを、

不知火は以前誰とも話さずにただ教室の後ろにたった独りでいた宮
離を思い出す。

不知火は携帯電話を下ろししばらく考える。

「しかし、オレは何で薬物のことを上昇薬物スキルジャンプなんて呼んでるんだろ
う、どこかで聞いたことあるのかなあ。」

その時、不知火の携帯がなった。

「もしも不知火？」

「おお不知火か。」

不知火の変な電話の受け方を軽く無視して話は進む。

「実は宮離春樹ってやつの腕章のことが解ったんだよ。あれは昔つ
ちの組織が考えたアタ……………」

不知火は急に視界が真っ暗になり地面に倒れた。
しばらくして不知火は再び起き上がった。
しかし起き上がったのは不知火ではなかった……

宮離は隣の教室にいた。

先日の事件であまり立ち入る人がいなかったためか事件後とあまり変わっていない。

宮離は教室に入り足元に付着していた黒い粉を集め始めた。砂よりも細かく、粉にしては固い。水に溶ける様子もない。そう、これは砂鉄である。

例えば、磁力を生み出し、砂鉄をコントロールするとか物体を宙に浮かせるとか能力を使えばいくらでも考えられる。

だが宮離はそんなことは気にしていない。

問題はなぜそれがレベル1の微弱な能力者にできるのか、正気を取り戻した犯人からは何も覚えていないと言う。しかも自分は砂鉄を操れないと言う。

「……能力の異常な上昇、第二の人格……」

間違いなく上昇薬物の使用者だ。

しかも今回のタイプは“使用したことすら覚えていないタイプ”だ。警備員は明日から検査を行い、薬物を使用した人物を洗い出す。

その前に不知火にあることを伝える必要がある。例えどんなことがあっても。

宮離は一人、そう思った。

例え不知火や宝条、クラスメイトのみんなに幻滅されても、また独りになるとしても宮離自信が一番口にしたくなくても。

突然電話が鳴った。

『もしもし宮離くん。』

「なんだ宝条。」

『今夜、不知火くんと一緒に部屋に行くね。』

「……解った。」

この二日で調べた三人の情報が三人の推理によって明かされる。

推理結果（ベストアンサー）（前書き）

― 第7話 ―

推理結果（ベストアンサー）

学園都市を夜闇が包む。だがそれと同時に、建物の光や街灯で町は明るい。

寮の一室にいる宮離はそんな夜景をただ見ていた。その視線はどこか決意に満ちた表情だった。

テーブルの上には、パソコンのキーボードが置かれていた。普段ソファーに座っているが、今夜はベッドに座りただ待ち続けた。するとピンポンの音がした。

宮離は立ち上がりドアを開ける。

「おじゃましていいかな。」

宝条がやって来た。

普段の学生服と違って白いワンピースにロザリオを着けていた。

「不知火は？」

宮離は不知火がいないことに気付く

「電話したんだけど出なくて…」

「そうか、まあ上がってくれ。」

宝条は辺りを見回しながらソファーに座る。

宮離は冷蔵庫から麦茶を出しコップについてテーブルに置く

「あ、ありがとう宮離くん」

「何で緊張してるの？」

「えっと、男の子の部屋にあまり来たことなくて。部屋きれいだね、弟の部屋とは大違いだよ。」

弟いたのか、と宮離は思った。

（不知火には明日教室で話せばいいか…）

宮離はコップの麦茶を飲み聞き始める。

「で、話って」

「うん、宮離くんの一年前のことについて。」

「……………何だ。」

「勝手に調べてごめんなさい。でもよく解らなくて、宮離くんが風
ヤシメント
紀委員辞めさせられたことくらいしか解らなかった。ごめんなさい
勝手に調べて…」

宝条は申し訳無さそうに宮離に言う。宮離もそれを聞いて安心する。
ある意味ちよūdい機会なのかも知れない。

宮離は宝条に不知火のことについて話す。

「宝条さん！」

「な、何？」

「聞いて欲しいことがある！実は不知火は上昇薬物の使用者何だ。」
スキルジャンプ

「……………え」

宝条は言葉が出なかった。少しも信じられなかった。

「どうして…」

「不知火がよく言っている『上昇薬物』と言う単語は使用者が販売

者しか知らな暗号みたいな呼び名なんだ。それに不知火は火炎放射ファイアフロスを自由に使っていた。これは、確か子萌とか言うちびっこ先生の作ったレポートだが。」

宮離は机の上のキーボードを押す。すると何もな空間から画面が現れる。何かのレポートに見えた。

宮離はレポートを指差し説明を続ける。

「でもこのレポートには“演算には時間がかかる”と書いてある。だが不知火は難なく演算していた！薬物による能力の上昇って言うのは演算処理の効率をあげる効果が、」

「止めてよ宮離くん！もう聞きたくないよ！」

宝条の強い声が部屋中に響く。

「宮離くんは不知火くんのこと何も知らないからそんなことが言えるんだよ。不知火くんは薬物なんかしてないよ。いつもレベル5になることが目標で」

「薬物に手を出した。」

宮離が割り込むと宝条は玄関を飛び出した。

ドアを閉める瞬間、宝条は小さく呟いた。

「……宮離くん、最低！」

（これでいい。大丈夫…また独りになるだけさ。）

宮離はソファーに座り目をつぶる。

やがてまぶたから流れたものは涙だった

不知火暁（マイフレンド）（前書き）

— 第8話 —

不知火暁（マイフレンド）

『……………金曜日の朝です。本日の天気は…』

朝のニュースがワンルームの部屋に響く。宮離はベッドから起き上がり、テレビを消す。

目の回りは赤く、目は渴ききっている。ドライアイではないがそういわれてもおかしくはない。

「学校…」

宮離がそうつぶやいた瞬間昨日宝条が言った言葉を思い出す。

（宮離くん…、最低！）

「……………」

宮離はどつとベッドに寝転がる。

「もういいや、今日は警備員アンチスキルが来て不知火が薬物の使用者だと解るはずだ。」

宮離は無気力にそう思った。

学校ではいつもと変わらず変わらない朝だった。宝条は教室に入る

「ヤッホー委員長。」

「あれ？宮離くんは？」

その時、宝条は昨日のことを思い出す。そして凍ったような言葉を言う。

「知らない」

その時ちょうど不知火が来た。ふらふらした様子で体調が悪そうなのが伝わる。

そんな不知火を心配して宝条は不知火に近づく。

「不知火くん大丈夫？」

「宝条さん…に、げろ」

次の瞬間、教室のまどから火がとびだした。

宮離はバイクに乗って学校へ急ぐ。その後ろから警備員の車が過ぎ去ろうとする。しかしそうではなかった。宮離のバイクに追いつくと助手席の窓が開く

「その少年停まるじゃんよ。」

「何だよ！」

「今、君の学校が大変なことになっている。ここは私たちにまかせて家に帰るじゃん！」

「だからいくんだ！不知火を助けにな」

「そんな無謀じゃん。」

「なら家に帰れ！」

そうこうしている間に宮離たちは学校についた。

学校はすでに立ち入り禁止で風紀委員がなんとかできる状態ではなかった。校舎の壁は真っ黒になっていて焼け跡のようになっていた。200mトラックの真ん中に何人が立っている。不知火と人質だ。宮離はバイクを降りてトラックに近づく。

「はっ！、やつと来たか」

しかし校庭のトラックの真ん中に立っていたのは不知火ではなかった。

いや性格に言えば不知火の身体に別人がいるかのようだ。普段の不知火からは想像出来ない殺気と狂気が彼にはある。

「少年あれは何じゃんよ。」

先ほどの警備員が宮離に質問する。

スキルジャンプ

「あれは上昇薬物を使った人間に現れる第二の人格だ。」

「少年、ここは任せて離れるじゃん。君なんかが勝てる相手じゃない！」

「…俺、一回あいつに救われたんです。“独りぼっち”から助けてくれたんだ。」

独りぼっち

それは人にとって最も恐ろしいであろうこの世の地獄。宮離はそう考えている

「だから俺もあいつを助ける。」

ざっと宮離は走り始める。そこえ巨大な火の玉が宮離の視界をつめる。

宮離は急いで分厚い氷の盾を作る

ぐわ、火の玉が宮離を包む。しかし間一髪宮離は無事であった。

「ひゃひゃ」ならこれでどうだ!!」

不知火は次に小さい火の矢を横一列に飛ばす。宮離は氷の盾で防ごうとするが火の矢は宮離に当たらず起動が変わる。みるみる内に火の矢は宮離の周りを回り飛んできた。

「くそ。」

宮離は3mほど跳んで矢を避ける。

「おおおお？何よその能力見たことないなあ」

「これは能力じゃない。ただの発条包帯だ。ハードテーパーキング」

「発条包帯！何でそんなの持ってるじゃん！」

宮離の言葉に警備員は驚く。

「あえて言うなら風紀委員辞めさせられる前に使っていた。」

【ドドドッ】

何か細かい爆発が宮離に当たる。宮離は体勢を崩す。

「イイネイネソレソーじあなきあ面白くねえ」

薬物の人格に身体を奪われた不知火はとにかくひたすら攻撃する。

宮離は発条包帯と氷結使い（フリーズハンド）の能力で不知火に近付こうとするが不知火の高速的な演算によって追い詰められていく。
さらに火炎放射、火の玉、遠距離攻撃が宮離を襲う。

警備員も援護したいが人質がいて下手に手を出せない。宮離がやるしかないのである。

しかし氷の盾もそろそろ限界でハードテーピングも焼け始めていた。攻撃しようにも人質がいるため警備員同様手が出せない。

「どうした宮離いもう限界かあアタック強制執行が聞いてあきれる弱さだけえ。」

「アタック？」

人質の宝条が恐る恐る言う。

「ああ、こいつはなあバカみてえに人に使われたカスなんだよお。だから助けてやるよ。コイツでなあ」

ゴウと音がする。

宮離の足元から突然火の柱が現れ宮離は吹き飛ばされる。そのまま勢いよく地面に叩きつけられた

「ぐはあ……」

「宮離くん！」

宝条の声は宮離には聞こえない。

(……………くそ、身体が)

宮離はさっきの一撃でほとんど動けなくなっていた。ハードテーピングも焼け切ってしまった。

「くっそがあああああああああ」

宮離は足に着いているハードテーピングで不知火に近づくと、その時目の前に炎が容赦なく当たる。

「バカがあちようしのんなあ」

不知火がそう言った時宮離が最後の力を振り絞る。

「うわあああああ」

ガン！

宮離の氷った拳が不知火に当たる。

「宮離、ごめんな。」
「しょうがないさ。」

二人は真昼の空に倒れた。

戦いの後（クライマックス）（前書き）

― 第8話 ―

戦いの後（クライマックス）

宮離は気がつくと救急車へ運ばれていた。
意識はもうろうつとしていて視界の周りには黒いカーテンがあるかのようだ。

そんな中宮離は救急車の外に一人の学生と思われる人物を見つけた。
黒いパーカーに金髪の髪型、学生ズボンにチエーンを着けている。
宮離はもうろうつとする。意識の中、学生の名前をつぶやく。

「……………木……………原……………」

宮離の視界が一面の黒に塗りつぶされる。

「……………ここは天国か？」

宮離は身体を起こし辺りを見回す。一面の白い壁、見知らぬ天井、
白いベッドに包帯だらけの自分。

「気がついたかい？」

誰かがドアを開け入ってくる。カエルの顔に人の身体、宮離は一目で気づいた。

「妖精さんですか？」

「僕は医者だよ。」

「いやまさか…」

学園都市にはとてつもなく優秀な医者があると聞く。その医者はカエルに似ていると言う噂を宮離は聞いたことがある。

「単刀直入に話すと君は、全身に軽い火傷と打撲を負っていたんだよ。」

「不知火はどうした。」

「彼なら心配いらないよ。君より軽傷だ。」

それを聞いて宮離は少し安心する

「それと君は少し入院したほうがいい。」

「解りました。」

気づくと夕方だった。宮離は夕日に染められた学園都市を見ていた。夕日がビルの間を沈んでいく。生徒が下校していたがその中に独りぼっちの人間はいなかった。その光景の美しさに宮離は言葉が漏れる。

「これでまた独りぼっちか」

「いや、独りぼっちじゃないぜ」

気づくと不知火がそこに立っていた。顔にガーゼを貼っていて学生服を着ている。

「不知火！」

「よ！宮離」

「もう大丈夫なのか」

「ああ大丈夫だ。お前のおかげだよありがとう。でもしばらくアンチスキルの施設にいることになるけどな」

そう、まだ不知火の中にある第二の人格を取り除く必要があった。

「オレ結局、宮離に助けてもらってばかりだな…」

「そんなことない！」

宮離が叫んだ。

「お前は俺を助けてくれたよ。あんな独りぼっちの闇の中から俺を助けてくれたよ。約束するお前の変わりに頑張つてやる。クラスのエースでも何でもしてやるよ、だから必ず帰って来いお前の居場所に帰って来い！待ってるよ。みんなで待ってるよ。」

「宮離……………」

人は独りじゃない。そう思えた一週間が今終わった。宮離は不知火の変わりをごとまでできるか解らない。しかし絶望はない。何故ならばクラスメイトや宝条がいるからだ。みんなと一緒に前に進めるから…

戦いの後（クライマックス）（後書き）

短いですが今までご愛読ありがとうございました。
第二章は少し時間が掛かります。

特別編：一年前の物語（前書き）

―そして幕を開ける予定―

特別編：一年前の物語

病院の受付にはいろんな人が来る。

学生のお見舞いはもちろん遠い地方から親御さんや先生などもよく来ている。

しかし、たまに珍しいのが今受付に立つ中学生だ。黒に少し青い色の髪に緑と白の腕章。

そして中学生は受付の人に腕章を見せる。

「ジャケット風紀委員の宮離春樹です。」

宮離は病院を出て携帯電話を取り出す。

『春樹、そっちはどうだった？』

「一応病院には行ったけど何も覚えていないだそうだ。」

『そっか、仕方ないな』

「今から戻るよ。」

『いや、すまんがトラブルだ………』

宮離は氷の塊を飛ばす。それが学生の腕に当たると粘土のように壁に付着し固まった。

「うわぁ何すんだよ」

「風紀委員です。能力使用の暴行現行犯で拘束する」

「ふざけんな！風紀委員がいきなりこんなこととして良いのかよ。」

「^{アタック}そのための強制執行だ。」

宮離は腕章を見せる。よく見ると緑と白の腕章に西洋の槍が描いてあった。

これが強制執行。現行犯の犯人に対し^{アンチスキル}警備員のように振る舞える風紀委員の試作特殊部隊。

宮離はその一員だった。

――現在の病院――

「へえ、そんなことがあったんだ。」

病院の中庭を車椅子が進む。

宝条は宮離の見舞いに来ていた。夏によくにあう白いロングスカートが目につく

「当時のアタックは賛否両論で試作期間が長く続いた。そこえ例の薬物が流行り始めた」

宮離は車椅子に乗って話を続ける。

宝条は中庭のベンチに座り宮離を見つめる。

――一年前――

「ただいま」

「見つかったぞ宮離！」

パソコンの前に座る風紀委員が宮離に向かって言う。

「販売者は木原天測（きはら てんそく）販売場所は第7学区の地下街だ。」

「地下街？監視カメラだらけの場所じゃないか。」

宮離は解らなかった。学園都市の地下街は監視カメラが多く、人目

が付く。そんななかで販売するスペースはない。

「まあこれを見る」

パソコンの画面を見ると地下街の排気管と電気の使用数値が載っていた。

「そうかこれか」

宮離は納得する。

「それともう一つ、」

パソコンの前に座る風紀委員は宮離に精神鑑定の結果を見せる。

「使用した時の記憶はないが薬物の名前は憶えるようだ。」
「なるほどね。」

宮離はすべて解り自分の机の中から発条包帯ハードテーピングを取り出す。

「いくらアンチスキルでも見つけれないだろ。アタックの定番だ。」
「

夜それは闇の世界、影が姿を表す。そんな世界に身をおく狩人、宮

離は今日も学園都市の治安を守るため地下街を走る。

「オペレーター」

『はい、オペレーター』

「今地下街へ入った搜索を開始する。」

『了解、他のメンバーも地下街へ入りました。』

「解った。しかし電力と排気量の微妙な数値の差から監視カメラの死角になっている区画は探せない。頼むぞ！」

宮離たちは地下街を探して走り回っていた。すると地下街から謎の空間を発見したらしい。

『宮離さん、木原を見つけました。』

「どこだ！」

『それが、地下街の外へ』

宮離は任せると言って走り出す。

地下街から出ると再び闇の中、しかしハードテレーピングを巻いている宮離にはたとえ広い所に逃走しても無意味。木原はすぐに追い詰められた。

「追い詰めたぞ木原天測！」

「おやおや見つかったか凡人野郎♪」

木原は再び逃げる。

「逃がすかこの野郎」

宮離はフリーズハンドを使い冷気を出す。すると以上な速度で走り出し跳びかかる。

「引つ掛かつたな馬鹿が」

木原は子供を盾にした。宮離は跳んでいるので空中で軌道が変わらず…

―現在の病院―

宝条は顔に手を当てる

「その後、盾になった子供は軽い低温火傷ですんだ。俺は木原に逃げられ、アンチスキルに逮捕された。アタックも解体されて当時のメンバーは風紀委員になった。」

「宮離くん、ごめんね私宮離くんに話ってほしくてっ…みつ宮離くんっ…傷つけてって」

宝条は泣きながら宮離に謝る。

「対したことじゃないよ。その後俺は風紀委員を辞めさせられた。それだけさ…」

「ゴメン私ジューズ買ってくる。」

宝条は自販機へ向かった。宮離は救急車へ運ばれたことを思い出す。

（アイツ…やっぱり木原だよな。）

「あ、あそこにいるのが宮離くんです。」

「そうか、ありがとな。」

宝条が黒い半袖のパーカーに金髪の男子学生を連れてきた。

「お、いたいたくそ野郎」

金髪の男子学生が宮離に話しかける。

「き…木原てめえ」

波乱の夏休みが始まる。

第2章（前書き）

遅くなりました。
第2章です。

第2章

カコンとジュースが自販機から落ちてきた。宝条はそれを広い宮離の所に戻ろうとする。

ここは学園都市の病院、夏休みになっても入院している患者や見舞いの学生でにぎわっている。

「あのゝすみません」

誰かに声をかけられ宝条は振り向く、その方向に半袖のパーカーを着た金髪の男子学生がいた。

「どうかしましな。」

「いやあ宮離春樹の友達かと思ってさあ」

「宮離くんなら中庭にいますよ。」

「ああ、ありがとう」

宝条は半袖のパーカーを着た男子学生と一緒に宮離の所に向かった。

―病院の中庭―

（不知火、どうしてるかなあ）

宮離は中庭で空を見ながら考える。そこへ宝条が誰かを連れてきた。

「宮離く〜ん」

宮離はてを振ろうとしたが宝条の後ろにいる金髪の学生を見て警戒する。

「あのね宮離くん。宮離くんの友達が来てたよ。」

「いよう宮離」一年ぶりだね凡人野郎。」

「宝条さん離れて、こいつは木原だ、木原　天測（きはら　てんそく）^{スキルジャンプ}不知火に上昇薬物を飲ませた野郎だ。」

宮離は車椅子から立ち上がり、木原と向き合う。

「よせよせ、今日は殺しに来たんじゃないんだ。ただ実験の準備してたらたまたま病院の近くに來たから会いに來たんだよ。」

「実験の準備？」

「この学園都市の能力者のAIM拡散力場を暴走させてあれを観測する。」

「あれってなんだ。」

「ま、その体じゃ止めるのはまず無理だが、実験結果くらい後で教えてやるよゴミ野郎。」

木原は中庭からメモ帳だけ残すと突然いなくなった。

「どこだ木原！」

宮離は自分の体が痛み出すのを感じて膝をつく。それを見て宝条が後ろから宮離に近づく。

「大丈夫宮離くん！」

「なんとかな。」

「ねえ今の木原さんのメモ帳。」

宮離は宝条の持っているメモ帳を見る。すると宮離は宝条の目を見る。

「宝条さん！」

「は…はい。」

「お願いがあるんだけど…」

―次の日、宮離の病室―

カエルによく似た顔の医者がカーテンを開ける。そこには全身を軽く火傷し打撲も何カ所がある患者がいるはずなのだが…ベッドには誰もいなかった。

―同日、第7学区―

「宮離くん大丈夫？」

宝条は心配そうに宮離を見つめ、バイクの後部座席に座る。しばらく

くするとバイクは宮離と宝条をのせ第7学区を走る。

夏休みになっても研究者や補修、部活などがある生徒はこんな暑苦しい朝でも通勤、通学している。

しかし宮離たちは違う。昨日木原が置いていったと思われるメモ帳を頼りに木原の実験を止めるため、バイクで第7学区のとあるビルを目指していた。

―第7学区とあるビルの屋上―

宮離はほとんど治りかけだが、まだ完治にはいたっていない体を長袖の白いシャツと制服のズボン、黄色いTシャツで自分に巻かれている包帯を隠していた。

二人はビルの非常階段を上がり、屋上に来た。すると木原がやはり来たかと言う顔でそこにいた。実際木原が残したメモ帳にはここが指定されていたのだ。そして木原は二人に向かい合う。

「よく来たな。普通病室抜け出して来るとは思わなかったよ」

木原が挑発的な態度でそう叫ぶ。宮離は宝条の前に立ち木原に告げる。

「何でこんな人気のない場所なんだ。」

「そりゃ、人に聞かれたくないからさバカ野郎。これから俺の話をよく聞け、まずお前らと呼んだのは俺と一緒に学園都市を救ってほしいからだ。」

宮離は驚いた。木原がこんなこと言うだろうか。

木原の言い分は、まず学園都市の能力者が無自覚に放つAIM拡散力場を使った実験が行われる。

それを一緒に止めないと学園都市が壊滅する可能性がある。と言っ内容だが宮離は木原に質問する。

「何でそんなことをわざわざ俺達に言うんだ。」

「お前は正義感があるし、戦闘能力もある。なおかつ風紀委員でも無いしな。」

「断ったらどうするんだ。」

「学園都市はオシマイだ。だから手を貸してくれ宮離！」

宮離と木原、かつて立場の違いから争っていた二人が学園都市を救うために共闘する。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8687z/>

とある科学の氷結使い（フリーズバンド）

2012年1月11日03時47分発行